

銀馬車かぼちゃ絵本ストーリーコンテスト 最優秀作品原稿  
(令和8年度銀馬車かぼちゃ絵本イラストコンテストにおいて題材となるストーリー)  
「ぎんばしゃかぼちゃ」(作:うさぎとかめのしっぽ)

—ここは小さなようせいがすむせかい。

そのようせいたちととてもなかよしの馬、マドレーヌは小さな町で、小さなおかしやさんをしていました。

大すきなようせいたちのために、毎日おいしいおかしを作ることが、マドレーヌは大すきです。

ある日、西からハヤブという馬がやって来ました。ハヤブは銀馬車カボチャという白いカボチャでできた大きな馬車を引いています。

その馬車は、中に入るとホクホクとあたたかく、メロンのようにあまくていいかおりがします。

そしてそれを気持ちよくゆらしながら引いてくれるやさしい馬…。

ようせいたちは、あっという間にハヤブと馬車が大すきになりました。

そのようすをお店からみていたマドレーヌ。

「いいなあ、ハヤブさん」

大きな体で、大きな馬車を引くにんきもののハヤブが、マドレーヌにはとてもかっこよく見えました。

マドレーヌの体は小さいので、ようせいたちが大すきなあの大きな馬車は引けません。マドレーヌはさみしいきもちになりました。

ある日、マドレーヌはハヤブが休んでいる間に、少しだけいたずらをしてやろうと思いました。

おいてある馬車のはしっこを、かじって食べてしまったのです。

あたたかくていごこちのいい部屋に、少しだけ風穴をあけてやるつもりでした。

しかしどうでしょう。なんとその銀馬車かぼちゃの馬車は、すごくあまくておいしいのです。

「おいしい!あまい!」

しばらくしてわれにかえると、マドレーヌはおどろきました。かぼちゃの馬車はもう半分しかのこっていませんでした。

マドレーヌはこまりました。これではもうようせいたちはこの馬車に乗ることができず、ガッカリしてしまいます。

「こんなつもりじゃなかったのに…」

とほうにくれるマドレーヌ。

しかし、しばらくして思いつきました。

「ハヤブさんは西から来たんだ。西におかえば、銀馬車かぼちゃを作っている場所があるかもしれない。新しい銀馬車かぼちゃをもらって来て、ちゃんとハヤブさんにあやまらなくちゃ」

ですが、小さなマドレーヌの足ではなかなかたどりつけません。日もくれてまっくらになり、風もつめたくなってくると、ついにマドレーヌはなきだしてしまいました。

その時です。後ろから馬のいななきが聞こえてきました。ハヤブです。食べかけのかぼちゃの馬車に、ようせいたちもしがみつくように乗っています。

「マドレーヌ、しんぱいしたよ」

ようせいたちが言いました。

マドレーヌはハヤブのかぼちゃを食べてしまったことをあやまり、かわりのかぼちゃをとりに行こうとしていたことを伝えます。

「後ろに乗りなよ。このかぼちゃを育ててくれたおじさんのところにいっしょに行こう」

ハヤブはやさしい声で言います。

マドレーヌはみんながハヤブをすきなりゆうがわかった気がしました。

日がのぼるころ、ようやくたどりつきました。あさひにてらされて、ピカピカと光る石のようにきれいなかぼちゃばたけ。

夜があげたばかりだというのに、そこではすでにおじさんがひとりでかぼちゃのおせわをしています。

マドレーヌが正直に話すと、おじさんは「人のものをかってに食べたのはよくなかったね。だけど、そんなにこのかぼちゃを気に入ってくれたなら、おじさんもうれしいなあ」と大きなこえでわらいました。

ハヤブもわらいます。なみだをポロリと落としたマドレーヌのあたまを、ようせいたちはやさしくなでてくれました。

ハヤブは、はたけでいちばん大きなかぼちゃで新しい馬車を作ってもらいました。

「今のやつよりもだいぶ大きいね」とマドレーヌが言うと、ハヤブは「そうだね。だからこれからはマドレーヌにも、馬車を引くのをてつだってほしいんだ」

マドレーヌは目をキラキラとかがやかせ、そして大きくなびました。

それからマドレーヌはハヤブとともに銀馬車かぼちゃの馬車を引くことになりました。

おじさんにもらったかぼちゃでおいしいおかしも作りました。またそれが大人気!

銀馬車かぼちゃの馬車には、今までいじょうにたくさんのお客様が集まるようになりました。

大すきなお客様たちにかこまれて、ハヤブとマドレーヌはとってもしあわせそうです。